

現人神と八紘一字の思想

——満州国建国神廟——

島川 雅史

目次

一・序

二・満州の宗教的前提

(一) 国家神道

(二) 諸宗教

三・儒教国家満州国

(一) 王道楽土

(二) 日満一徳一心

四・満州帝国の国家神道

(一) 天皇教の導入

(二) 建国神廟

五・八紘一字の思想

現人神と八紘一字の思想（島川）

(一) 皇道連邦

(二) 民族差別の正当化

(三) 敗戦と神社

六・結語

一・序

国家神道は、日本国内においては「上から」のコンフォ
ーミティ形成の支柱として構想され、初期にはその国教化
が試みられたが成功せず、結局帝国憲法の制定前後に「超
宗教の国家祭祀」として確立されるに至った。国家神道の
政治的本質は主権者・現人神天皇の意志を絶対化すること

にあり、またこの「前近代」というよりも、むしろ前法的な君主政」(相沢久)に向けて国民統合の方向を示すことにあった。さらに国家神道は靖国神を創出してその体系に民衆的基礎を獲得し、一定の「下から」の支持を醸成することに成功したのである。

一方、近代日本の対外膨張の過程の中で、国家神道は戦争・侵略を正当化する理念となった。天皇が神聖不可侵である以上、その統帥権の下に行なわれる戦争はすべて「聖戦」であった。神国日本の論理は靖国神に支えられて、海外侵略へ向かう八紘一字の思想へと展開して行くのである。そして、動員された日本の民衆のみならず、軍事占領された植民地の民衆もまた、「天壤無窮の皇運を扶翼」することが求められた。

海外植民地において、国家神道はその神権的・暴力的な本質を露わにしている。天皇制国家は八紘一字の名において「大東亜」に日本を盟主とする垂直的統合国家を建設しようとした。占領地での国家神道は当然のことながら民衆統合の支柱とはなり得なかったが、そこに近現代の日本で支配的であった政治思想が最も純化されて表現されているという点で、また侵入した日本人の行為を正当化する理念であったという意味で、重要な問題を照明するものになっている。

筆者は前稿「現人神と靖国の思想」において、神国日本の論理を、天皇教と靖国神の結合を媒介とした国内コンプレキシティ形成という視点から検討した。

本稿は、海外植民地で露わになるこの国家神道Ⅱ天皇教の「前法的」様相を、研究の少ない傀儡国家満州国の場合について確認しようとする試みである。

二・満州の宗教的前提

(一) 国家神道

一九〇六年(明39)一二月刊の『神社協会雑誌』に「満韓に於ける神社」という紀行文が載っている。そこでは、激戦地旅順にさえ神社が見えないのはどうしたことか、と筆者が嘆く程度であり大小計七社の名を挙げるにとどまっている。うち「満」に属するものは二社にすぎない。その一は遼陽所在の招魂社で、一九〇四年(明37)の遼陽会戦の戦死者と前後の病死者将校以下三七六〇名の遺骨を合葬したもので、墳墓が即神社となっており、他には安東県に私設の小神社(祠堂)がある、と記されている。招魂社は特殊例であるので、この時点では「満」の神社は事実上小神社一社のみであった。後年の『神社協会雑誌』では満州の神社の「嚆矢」として、一九〇五年(明38)「当時の軍

政署に於て、神宮遙拝殿として安東に安東太神宮を建立」し、それが「現今の安東神社の起源」となったと記述されているが、この「太神宮」が私設小神社のことであろうか。また、「独立」時の『満蒙年鑑』は神社の起源を一九〇八年設立の二社に求め、この「祠堂」を神社とは見なしていない。その後明治年間に七社の設立を見るが、神社数が増加するのは大正年間、この時期には三五社が新設されている。以後満州国「独立」の一九三三年(昭7)三月までに増加したのは二社にとどまり、この時点で計四五社であった(設立年判明分)。その大部分は関東州・満鉄付属地に所在している。(付表Ⅰ・Ⅱ参照)

一九二二年(大11)、勅令『関東州及南満州鉄道に於る神社廟宇及寺院に関する件』は、神社設立には大使の許可を要すると規定し、さらに二四年(大13)一〇月の『神社設立内規』によって統制されることになった。この『内規』は第一項で祭神の性格を次のように規制している。

左の諸神の一柱たること。

- 一、皇祖皇宗列聖及皇族の諸神。
- 二、国家に対して勲功顯著なる諸神。
- 三、国土経営の勲功顯著なる諸神。
- 四、民族の祖神にして皇室の崇敬特に篤かりし諸神。
- 第五項では、氏子崇敬者が一五〇戸以上あること、ただ

現人神と八紘一字の思想(島川)

し「在住日本人少なきときは百戸以上あること」を指定している。なお、日本国内では遠隔地居住者を崇敬者と呼んだが、満州の場合は氏子とは日系を、崇敬者とは日系以外の信者を意味した。

一九二四年(大13)一〇月以前に設立された神社はほぼ関東州・満鉄付属地内に位置してその祭神は多岐にわたり二六種に達している。対して二五年(大14)以降三五年(昭10)末までの設立社はほぼ満州国内に位置し、天照皇大神、明治天皇、大国主神の三神が主として祀られ、特に満州国行政圏内の三六社においてはこれ以外の祭神を有するものは朝鮮神宮、楠木正成を配祀した二社のみとなっている。(付表Ⅰ・Ⅱ参照)

つまり、満州においても『内規』を境として宮内省掌典・八束清貫言うところの「帝国の神祇」のみが祀られるようになっていたのである。一九四二年頃にはこの傾向は最も顕著となっている。(表①)

神社の規模は大小さまざまであった。付表Ⅰ・Ⅱの神社計八〇社中で、最大のものは氏子戸数二二、二〇〇の大連神社であり、劉家河神社の一九が最少となっている。付表Ⅰは一九三五年末(昭10)、Ⅱは三六年末現在の調査であるので、これにほぼ対応する人口統計によって氏子戸数と日本人人口を対照すると表③のようになる。つまり、約六

史苑(第四三卷第二号)

表1・満州神社状況

神社総数	大正一五年	昭和一〇、一一年	昭和一八年
神社総数	四〇	一二(昭一〇)	一二三六
関東州	八	三二(同)	
満鉄付属地	三〇		
領事館内	二	三六(昭一一)	一二三六
満州国			
祭神	天照大神のみ 一六 天照大神と明治天皇、大国主神等 一六 その他 明治天皇、事代主神、靖国神、応神天皇等	同 一四 同 一九	同 九七 天照大神と明治天皇 七五 天照大神と明治天皇、大国主神 二一 天照大神と明治天皇、神武天皇 六 天照大神と大国主神 四 その他
神職人数	一八人 一六社	三〇人(昭一〇) 二二社(昭一〇)	五〇社
氏子・崇敬者戸数	四五、三五二 二一、三四三 二三、五七七 四三二	二八、一九七(昭一〇) 四二、五九〇(昭一〇) 二九、七三九(昭一一)	一六四、四四六(昭一〇) (うち満鉄より 九、〇四一円 大連市より五、六〇〇円)
神社総経費	(うち満鉄より 九三、八七二円 一〇、二六一円)		

在の数字。出典・付表I・II。

表3・満州人口と氏子戸数

	日本人口	朝鮮人口	氏子戸数
満州国	三八五、五六八	八八四、一五六	満州国行政圏内 二九、七三九 満鉄付属地 四二、五九〇
関東州	一五九、五九九	三、二五一	二八、一九七

満州国の人口は一九三六年、関東州は三五五年の数字。出典・外務省東亜局編『第二八回満州国及中華民国在留本邦人及外国人人口統計表』、『第二九回・同』。氏子戸数は付表I、II。

五万人の在留日本人に対して氏子戸数は約一〇万戸である。しかも氏子中の約七割は日本政府の直轄地に在住している。神職数については、三五年九月末の時点で、『満州神職会』会員の在社するもの二二社、神職数計三〇名である。複数の神職を有するものは大連(四)、金比羅(二)、沙河口(二)、奉天(二)、撫順(二)の五社で、他は在職一名の神社であった。しかも神職在社の神社はほぼ関東州(七)

出典・関東庁編『関東庁施政二〇年史(上)』(一九二六・復刻一九七四)、日本外事協会編『満州帝国総攬』(一九三四)、『満州年鑑』昭和十一年版(一九三五)、高山馨編『ポケット満州国要覧』康徳八年版(一九四一)、国務院文教部『第三次満州帝国文教年鑑』(一九三七)、『満州年鑑』昭和十一年版(一九四三)、『神社協会雑誌』三六卷一〇号。

表2・満州神社規模

氏子・崇敬者戸数	関東州	満鉄付属地	満州国行政圏内
一	二	一一	五
一〇一	三	三	九
二〇一	四	四	一〇
五〇一		四	四
一、〇〇一	一	五	四
二、〇〇一		四	一
五、〇〇一			二
一万以上	一	一	
不明			一
計	一二	三二	三六

前二者の数字は一九三五年末現在、後者は一九三六年末現在

現人神と八紘一宇の思想(島川)

區分	內地人			朝鮮人			台灣人		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
滿州國	二五、五三	一七、〇四五	五五、五八	四七五、〇七	四九、〇三	八四四、五	一九九	三二	三〇〇
閩東州	八六、九九五	七九、三七四	一六六、三六九	二、七六	一、八九	四、〇五	七六	六五	一四一
中華民國	三、二一八	六八、二〇二	六、三〇〇	六、三〇〇	四、九三	一一、四三	七、九〇	五九六四	二、九五四
香港	七〇	七〇五	一、四一五	五	二	七	二一八	一	一七六
澳門	五	七	一二	二	一	三	二	一	三
合計	三、五五一	二七六、三三	六三、六四	四八三、六六	四九、九八	八九、五四	八、三六五	六、三〇九	一四、五九四
昭和二年末	三〇〇、六七四	二四九、〇七五	五四九、七五二	四四六、二三	五八七、五五	八三三、七六七	八、九二	六、〇二八	一四六、〇
昭和三年末	二五、八七九	二〇九、六七七	四六、五五六	四〇八、三五	三五九、五三	七七七、八〇七	八、八三	五、六四一	一三、八四
昭和四年末	二二、一六	一七、六六	三九、八二	三六、七五	三六、九三	六八、七四八	七、五六	四、九六七	一二、三三
昭和五年末	一七、三四五	一五、四六	三四、八一	三二、三五	二七、六〇	六〇、一五五	六、〇一	四、四四〇	一〇、八四一
昭和六年末	一四八、八八	一三七、八八	二八六、六六	二五九、九四	二九、五八	二五九、五三	六、九	四、〇八	一一、三〇七
昭和七年末	一四七、一	一三、七三	一六〇、八四	一三七、三三	二八、五〇	一六六、七三	五、七四	三、七八	九、五二
昭和八年末	一四三、五〇	一三、一三	一五七、六三	一三三、九四	二七五、九〇	五九九、〇四	五、七九	三、七五	九、五四
昭和九年末	一三八、六六	一三、四四	一五二、一〇	一三三、九四	二六、三三	五九、三四	五、五〇	三、四五	八、九三
昭和十年末	一三、八四	一〇、五三	二四、三七	三三、九八	二五、五九	五九、五七	五、四四	三、五三	八、七〇
昭和十一年末	一六、九九	一七、七四	三三、七三	三〇、五九	二四、九三	五五、五二	五、四四	三、四一	八、八七
昭和十二年末	一三、〇五一	一二、七九	二五、七〇	二九、九三	二四、五二	五四、四五	五、四四	三、四一	八、八五

第一次	一九七〇年
第二次	一九七八年
第三次	一九九〇年
第四次	一九九〇年
第五次	一九九四年
合 計	一九七〇—一九九四

と満鉄付屬地（二四）に限られ、満州国内での吉林神社（一）を唯一その例外としている。翌三六年には神職数は三六名、三七年には三九名に増員されている。以上のことを考慮すれば、日本政府直轄地以外の神職数は極めて少数であつたと考えられる。満州国行政圏内（「満鉄付屬地」を除く言い方）所在の神社はこれ以後激増している（表①）が、これは開拓団など日本人移民の進出に歩調をあわせるものであつた。（表④⑤）開拓団の神社設立は一団一社を原則としたが、団員がその祭祀担当者となり、「専門の神職ではないのが多い」状態であつた。

地方の事務	民政署長 警察署長
管掌	州庁内務部字務課 關東局司政部行政課 各地帝國領事館
地城	關東州 滿鉄付屬地 滿州國

現人神と八絃一字の思想（島川）

氏子・崇敬者は三人以上の総代を推挙し、氏子総代または崇敬者総代はその住所氏名を関東州では民政署長、付属地では警察署長に届け出なければならず、両署長が「不適任と認むる者」は改選させることができた。また神職の任命には「氏子総代又は崇敬者総代の推薦に係り且大使の認可を必要とする」ことになっていた。神社が「内地」と異なるのは、①神職が「官吏又は官吏待遇たる身分を有しない」こと、②社格の制度が存在しないこと、③国庫供進金制度のないことである。さすがに「外国」では神職を官吏化することはできなかったわけであるが、神社は先の『内規』を始め行政的には完全に日本側の統制下に置かれていた。

一九三七年（昭12）の『満州国に於ける治外法権撤廃及び南満州鉄道付属地行政権の移譲に関する日本国満州国間条約』では、神社、日本人教育、兵事の行政権は例外規定として日本側に留保された。神社については、この条約の「付属協定並両国全権間の了解事項」によれば、「神社は、其の本質上、日本国又は日本国民が、日本国法令に依つてこれを満州国内に設置することを得、神社に関する行政は日本国政府がこれを行ふ」⁽⁵⁾（傍点引用者）のである。同年の『神社協会雑誌』は、この付属協定について「言ふ迄も

なく、神社は我が大和民族特有のものであり、一般宗教とは区別せられるものであるから……日本人固有のものとして取扱ひ、其の行政も之を満州国の行政に移すよりも日本側に保留するのを妥当と解されたものと考える」(傍点引用者)と解説している。これ以後、満州国内の神社は「満州国駐劄特命全權大使」(関東軍司令官)が管掌することになった。

表6・満州の忠霊塔 (昭和十五年六月末日現在)

旅順忠霊塔	祭神数	設立年月	場所
大連忠霊塔	一四、六三三	明治四〇年五月	旅順白玉山
遼陽忠霊塔	一四、九一四	同四一年九月	大連中央公園
奉天忠霊塔	三、八〇四	同四一年一月	遼陽駅南方
安東忠霊塔	三、四三七	同四三年三月	奉天千代田広場
新京忠霊塔	一、五三三	昭和三年六月	安東鎮江山
哈爾濱忠霊塔	四、四四六	同九年二月	新京
齊齊哈爾忠霊塔	一〇、四一〇	同二年七月	齊齊哈爾
承德忠霊塔	二、六四二	同二年七月	承德
祭神総計	一〇三、九三二		

出典・高山馨編『ポケット満州国要覧』康徳八年版(一九四一)。

他の神道施設としては各地に設けられた忠霊塔・忠魂碑がある。日本側所管の忠霊塔は一九四〇年(昭15)までに九基建設され(表⑥)その後ハイラル忠霊塔を加えて一〇基となり、合祀総数は約一万三千に達した。その大部分は日露戦争以降の日本人であるが、一九四〇年以後は関東軍司令官指揮下に戦没した満州国軍警も合祀されている。約言すれば、神社は祭神規定を始めとする諸規制に見られる通り、天皇制政治思想の可視的支柱として、在満日本人のために満州地域へ移入されたものであって、『満州国民』の大部分を成す中国人の『崇敬者』の割合は全く無視しうるものであった。

(二) 諸宗教

一方、日露戦争を契機として、日本の諸宗教も国家神道にぎびすを合わせて満州への進出を開始している。満州『建国』三カ月前の一九三一年(昭6)末の段階で、教派神道・仏教・キリスト教の状況は表⑦の通りである。この時点で国家神道は四二社神職二二名であり、布教所数では他宗に優るもののその実態は前記の通りであって、天理教一宗の布教者数一〇一名に比しても内容的遜色は覆い難い。とはいえ、この三派にしてもそのほぼすべてが「日本側」だけの宗教であったことに変わりはない。

表7・日本側諸宗教 (昭和六年末)

宗 教	関 東 州 内			満 鉄 付 属 地			領 事 館 内		
	布 教 所	布 教 者	信 徒 戸 数	布 教 所	布 教 者	信 徒 戸 数	布 教 所	布 教 者	信 徒 戸 数
大 社 教	二	五	六、三〇三	一	一	二五二	一	一	三
黒 住 教	一	五	八七七	一	一	一	一	一	一
金 光 教	一	五	四五三	一	一	三七一	一	一	一
天 理 教	一	四	一、二二五	一	一	一、三〇七	一	一	一〇
御 岳 教	一	一	一、三五九	一	一	一、七八九	一	一	一
神 行 教	一	一	三三八	一	一	一〇〇	一	一	一
実 行 教	一	一	一三〇	一	一	一〇〇	一	一	一
神 道 本 局	一	一	九四三	一	一	一八八	一	一	一
そ の 他	一	一	七二三	一	一	四七七	一	一	一五三
計	二五	一〇一	一二、三六一	三五	七〇	四、四八五	二	二	二二四
真 言 宗	七	二九	七、〇六三	二五	三二	七、八九〇	一	一	四九二
曹 洞 宗	三	九	二、〇一一	一四	一四	一、九四九	一	一	五七
浄 土 宗	四	一〇	一、七〇〇	一七	二、三〇一	一、一三	一	一	一一二
臨 済 宗	一	九	一、八六四	一六	二、一一三	一、一七	一	一	一一三
天台宗	六	一九	一、二二三	二四	一、一三七	一、五〇二	一	一	一三七
日 蓮 宗	一	九	一、一九三	一五	二四	一、五〇二	一	一	一三八
仏 教	一	九	一、一九三	一五	二四	一、五〇二	一	一	一三八

トランド聖書協会）に求められる。⁽¹⁹⁾一九四〇年（昭一五）の時点で、新旧両派の信者数は二〇万人強に達している（表⑧）が「日本側」の宗教に比してその特色となっているのは「満州人」に対する浸透度の高さである。最大の天主教の場合を例にとれば、その教勢は表⑨の通りであり、しかもその信者は「満州に於ける各宗教の中で最も真面目に⁽¹⁹⁾て、かつ志操の堅固なる宗派の一」として評価されている。

昭和十五年	昭和十年	昭和七年							
寺院・ 教会数	寺院・ 教会数	寺院・ 教会数	仏教	道教	回教	喇嘛教	天主教	基督教	総計
信徒数	信徒数	信徒数							
布教者数	布教者数	布教者数							
一、七七〇、六九二、三七七、三三七、一三二、六三六	一、七七五、二五二、三七七、四七二、四三、五七〇、一一九、八五〇、一一三、三六八、五八、八八七、二、五八八、二九九	七五六、〇〇〇							
二、〇一九	二、〇三三	七九二							
四、二四七	四、四九五	一、九六五							
二、八二三	二、八六二	一、四九六							
五〇一	六五六	三四七							
二二、三五七	九四二	三三六							
一、〇三五	八九〇	五八一							
六六七	五八二	三〇二							
六七五	八九〇	四、九二九							
三、九二九	一〇、四二七	一、八二三							
五、九二九	四、八六八	一、〇四三、〇〇〇							

表9・満州カトリック教勢一覽 (昭和十三年七月現在)

信 徒 總 数		(満州カトリック教務処調査)
洗礼志願者總数	(求道者)	一八四、九四〇名
司教及び教区长	(外国人宣教師)	三〇、七三九名
教 区 長	(満州国人宣教師)	一名
外国人司祭	(外国人宣教師)	二六八名
満州国人司祭	(満州国人宣教師)	二二一名
外国人修道士	(満州国人宣教師)	一〇〇名
満州国人修道士	(満州国人宣教師)	四〇名
満州国人修道士女	(満州国人宣教師)	四三名
大神修院修生	(大神学校学生)	一四四名
小神修院修生	(小神学校学生)	五五名
伝 道 士	(男 五七〇 女 四一七)	九八七名
学 校 教 師	(男 四八四 女 四〇六)	八八〇名
教会受持小区域数	(集会所)	一八八区
公 所	(簡易なる教習と読書算術等を教授するもの)	六一三箇所
聖書学校数	(男 六、四二二 女 八、一〇九)	六一三校
同 学 生	(男 一四、五二一名 女 二二三校)	一四、五二一名
小 学 校 数	(男 一〇、七六三 女 五、六一八)	二二三校
就 学 児 童		一六、四四四名

初 中 学 校		七校
同 学 生	(男生女生共)	一、〇三〇名
孤 児 院	(育嬰堂と称す)	五四箇所
収 容 孤 児 数		一、七二二名
養 老 人 院	(男女共)	三六箇所
就 養 老 人 数		七二二名
病 院	(施医院と称す)	五箇所
施 療 院	(二箇年延人員)	六二箇所
被 診 者		五五六、八二九名
印 刷 所		二箇所
各 種 工 場		一一箇所

出典・『満州宗教誌』二二〇―二二一頁。

表⑨での外国人聖職者は、全国一教区で各教区毎に国籍を統一している仏(二教区)、米、加(二)、スイス、独、奥、ベルギー(二)、露の各人であるが、注目すべきは満州国人聖職者の数と、学校・社会福祉事業等の数値である。さらに信者の内訳を最大教区の吉林教区で見ると、満州国人信徒三八、八四三、日本人信徒約五〇、外国人信徒二、九〇〇となっており、地域的・民衆的基礎を確立していることがわかる。

在来諸宗教の場合は、民衆生活での土着度において当然にも「日本側の宗教」を無視しうるほどの高さを持っていた。(表⑧)一九三六年(昭11)の時点で、寺院教会数は

五、一七六、信徒数二五〇万強を数えている。神社との比では寺院教会数で約一対五〇〇である。しかも、この他宗教の数字は実際の何分の一かなのである。例えば本表⑧では全宗派にわたってその数字は激増している。しかし、これは実際に施設信者が増加したということではなく、満州国政府によってその国民が「発見」されていく過程を表しているのに過ぎない。反満抗日の「匪賊」の解放区(後注89文献参照)については公式統計に全く現れてこないわけである。一九三二年(昭7)末の仏教信徒数を例にとれば、奉天省・六九七、三一六。吉林省・三九、九三二。黒竜省・五、七七七。熱河省・統計なし。興安省・統計なし。東省特別区・一〇、九二二。新京特別市・二、五二二。となっている。熱河、興安両省はこの記録の編者の言うように「治安の不確定の為に全然調査が出来」なかったのである。表⑧は、国家としての満州国の実態を示しているものと言えよう。

三・儒教国家満州国

(一) 王道楽土

満州国は儒教思想を掲げて発足した。『満州国建国宣言』は、「三千万民衆の意向を以て……満州国を創立す」と述

現人神と八紘一字の思想(島川)

べ、「施政は必ず真正の民意に徇う」こと、「王道主義を実行」することを約束し、国民に対して「当に礼教を是れ崇ふべし」と命じている。

「礼教」すなわち儒教は清代までの国教であったが、中華民国の成立以来国家による祭祀は廃止されていた。清朝の廃帝溥儀を執政に立てた満州国は、同じくその前代の儒教政治思想をもって「上から」のコンフォミティ形成を企てたのである。

当時の文廟(孔子廟)は政府文書によれば「概ね往年の祀典廃止と共に之を顧るもの少く、徒に自然の跳梁、兵匪の侵害に委ね、廟宇は毀損し、墻壁は倒潰し、旧態を維持するもの無く甚だ憂慮すべき状況」にあった。満州国はこの遺物に依って、「近世漸く廃れたる祀孔典禮を復活し之を国祭となし、以て民心の抛る所を宣明」しようとしたのである。文廟数は一九三三年(昭8)の時点で国内に六三とされているが、他宗教の場合と同じく、熱河、興安省所在のものは含まれていない。三五年(昭10)段階では七八廟となっている。四四年(昭19)の時点では八八とされ、「建国前開建」分として七五という数字があげられている。また設置者別では省立七、県立七三、旗立一、市立二、私立五となっている。

「大同」元年(昭7)にはこの文廟を中心として、全国

的な儒教振興運動が企画された。八月の政府文教部の訓令は次のように命じている。

- 一、本年秋季の孔子祭は新京及各地方に於て均しく盛大なる典礼を挙行す、各地方は事前に祭祀に関する一切の事項を準備すべし。
- 二、各地方の文廟は資力の許す限り速に修理を加へ装飾をなすべし。
- 三、本部より祭祀参考小冊及尊孔宣伝標語を印刷し送付す、各省区市は所属に命令配布せしめ或は重要なるものを公示すべし。
- 四、丁祭日には各地方に於て市民全体大会を開催し孔子の事蹟を講演す、各省区市県公署より之を主催す。
- 五、各校学生は師長の指導により校内に於て祀孔典礼を挙行し並孔子の言行道德學問等に関し講演を為すべし。

同年の秋季中央丁祭では鄭國務總理が主祭官となり、翌年の秋祭では執政溥儀が祀祭を行なった。この時の「祀典」の様子の前半三分の一ほどの次第を引用してみよう。

「対引官恭しく執政を先導して先師祝案前に詣り、三炷香を上り迎神の礼を行ひて復位し、典樂平之章を奏す。同時分引官張景惠以下の分献官を導きて配位従位及び東西兩廡先賢先儒に上香し迎神の礼を行ひ、訖りて執政各分献官を随へ再び先師位前に詣り、三跪九叩して、初献の礼を行

ひ、樂宣之章を奏し、羽籥の舞を舞ふ……」

新京文廟の場合は、先師が正位の孔子、配位が宗聖曾子、亜聖孟子など四、従位が一二、先賢先儒が一五三位祀られている。拜礼法は文教部礼教司の制定した「親行釈尊礼節」に則っている。三跪九叩は三回ひざまづいて九回地に叩頭する。溥儀はこの時これを二回、三叩を二回、三拜を一回している。この時点では、宗教的にはまさに清朝の復辟になっている。

満州国は儒教国家として出発した。しかしその前提たる文廟は前代遺物と化していたのであって、その民衆的基礎においては国家神道と大同小異であったと言えるだろう。

ただし、中国の文廟国家祭祀には歴史的伝統があり、民俗宗教としての儒教も広範な信者を持っていたのであるから、日本の神道よりは国教としての可能性はありえたであろう。

滅亡王朝大清帝国の形骸をまとった新国家は関東軍・板垣少将によれば「軍閥の暴政下に呻吟して居りました三千万民衆に対し天与とも称すべき希望と光明とを与へ……王道樂土を建設せんとする」五族協和の理想国家であった。

しかし、板垣が溥儀を推戴した東北行政委員会なるものを弁護して「三千万民衆の総意と云ふても、人民が一々発言する方法はありませんのでは是等個々に独立した各独立者の合意結合の結果に待たざる可からざるは勿論であります」

と述べているのは、語るに落ちたと言ふべきであろう。これが「真正の民意」の正体である。満州国は関東軍の急造国家であった。関東軍自体が満州地域に対する明確な方針を持っていなかったことは、例えば『石原莞爾資料』の建国前数年分を見れば明らかである。その公私文書によれば、支配形式として「最も簡明なる軍政」「関東軍満蒙領有計画」「一九二九年七月」「我領土」「満蒙問題私見」「三一年五月」「宣統帝を頭首とする支那政権」「満蒙問題解決策案」「三一年六月」「満蒙總督府」「満蒙統治方案」「三一年一〇月」「日本指導監督下に簡明直截なるもの」「満蒙問題の行方」「三一年一二月」と推移している。

この国は傀儡国家以外の何物でもなかった。それゆえ、急造された満州国が儒教理念に立つ独立国家としての体裁をとる場合に、主人たる皇道国家日本との関係を理念的に整合させなければならないという問題が生じた。『建国』の年の一〇月、『満州評論』誌上で小山貞知（満鉄嘱託・自治指導部顧問）の「王道主義國家連合」という論文がこの問題を扱っている。

小山は王道の特徴として、その王位が「天之を定め天は民意の帰趨によりてその人を決する」ことを挙げている。つまり「禅譲放伐易姓革命等」によって王者個人は置換可能だと言う。対して皇道の場合は王位が「一天万乗の君」

に在るので「世界に比類なき安定性」を持っているという。彼はこう結論する。

「皇道はそれ自体他民族に移植することは困難なり。然るに王道国の『王』位は民意の帰趨、離反によりて革命性を持つものであると同時に所謂王道はこれを支那民族以外の如何なる社会にも移植し得らる。然り而して……その実践はドーしても皇道の指導能力を俟つ外はないであらう。……而して皇道国日本はその神武を以て、及びその経営力を以て、東洋的王道主義國家連合を支援指導すべきである」

現人神の理念は王權神授説を超えるものであった。この理論は後述の「八紘一字の思想」に連なる。

（二）日滿一徳一心

一九三四年（昭九）三月、執政溥儀は皇帝に即位する。

これは、前年八月の日本政府閣議決定『満州国指導方針要綱』が確定している「満州国は立憲君主制を究極の目標とする」という方針の早期の実現に他ならない。廃帝溥儀の半生の目標は清皇帝としての復辟であった。建国時にはその希望する復辟ではなく執政への就任であることに對して、交渉相手の板垣に激怒している。三三年三月の日本の國際連盟脱退は「民本國家」の粉飾を不要にして、廢帝の宿願

に道を開いたのである。

満州国の成立が唐突であつたように、帝政実施も唐突なものであつた。橋樑の編集になる『満州評論』という雑誌は毎年関東軍・國務院・協和会などの年賀・祝賀の広告を載せ、軍首脳の論文などを掲げている御用雑誌といふべきものであるが、この雑誌でさえ復辟論は否定していた。三年一月の小山論文は言う。

「建国未だ一年も経たず王化尚ほ治ねからざるに……内治安をナイガシロにし外国際關係を顧みず今直に政体を変革し帝政を布かんとするが如きは全く清朝の復辟を夢むか否らざれば一部人士の權勢を獲得せんとする野心行為といふより外に何等意味をなさない。……（かかる）政治運動は絶対に之れを排除するを要す、敢て当局の注意を促がす。」
橋樑も言う。

「天命説といふが如き迷信を別として、凡ゆる帝制論者及びその共鳴者達の主張するところは、世襲君主制以外には国基乃至民心を安定させる形体を發見し得ないといふにあるらしい。併しこの説は聊か独断の嫌ひがある。先づ第一に王道思想の闡明者たる原始儒教の學者達は天命が至つて不安定なものであることを主張し、随つて元首の任期は終身制を理想とし、（唐虞の禪讓）世襲制は次善の道に過ぎない（三代の放伐）と批判して居る。これに依れば天命

説乃至王道論の純真な立場に於ては清朝の滅亡は申すに及ばず、溥儀氏の系統に世襲君主たる地位を与へるということにも何等の根拠を見出すことができない。」

「天命説乃至王道論の純真な立場」は関東軍に全く無縁のものであつた。溥儀の皇帝登極はまさに橋の言う「天命説といふが如き迷信」に基づいて行なわれたのである。

執政就任の場合と同じく、皇帝即位の場合も「三千万民衆の意向」が喧伝された。鄭國務総理の帝制実施の声明は言う。

「王道樂土の実現を謳歌せるは、これまことに天佑といはざるべからず。この天佑は、わが満州国の建国が、天命に遵由せると共に……執政の乾徳に因る。順天安民は、建国の理想なり。今や天佑の加護顯著にして、王道を頌唱謳歌せる人民は、至情を尽して執政の天命に順ひて帝位に即かれんことを請願して已まず。」

鄭國務総理の机上には「溢るる至情を書きつらねた請願書が、刻々、山と積まれ」、その結果総理は「民意——即ち『天意』によって動かざるを得なかつた」という。つまり、帝制実施を正当化した理念も、王道國家論の帰結としての天命説、儒教主義であつた。

溥儀の登極は事実上の復辟であつたが、先の総理声明は「これを誤りて、清朝の復辟となすが如きは、建国の理想

と使命とに忠なる政府の断じて取らざる所」であると強調している。これはなお内外への配慮があつたためであり、同日に出された謝外交部総長の談話は次のように述べている。

「中華民國は、右即位の結果につき、何等危惧猜疑の要なき次第で、日・満・支の三国が相提携して東亜の和平に尽すの途は、いよいよ広く開かれたものと思ふ」

近衛が「國民政府を相手にせず」と声明するのは「康徳五年」の一月である。（満州国の年号は「大同」、満州帝国の年号は「康徳」）関東軍のみならず支那派遣軍が中国全土を制圧していたならば、溥儀の夢であつた「後清」帝國が成立していたかもしれない。

溥儀の即位式は宗教的行事としての「郊祭の儀」と政治的行事としての「登極の儀」に分けて行なわれたが、後者は溥儀が皇帝として初の詔書を下達する場であつて、即位そのものは前者において成立していた。政府文書によって「郊祭」の主要な次第を見よう。

「三日間に亘る潔斎を済ませられた 新帝は……満州古風の礼装いと厳かに天壇上に南面して御着席、此時燭柴迎神の儀あり、続いて皇帝は神案の前に進ませられ、玉を薦して定位に復して拝礼遊ばされ、更に再び神案の前に進ませられて三爵……次いで承聖の儀あり、終つて送神の儀、

送燎の儀あり、茲に滞りなく式典を終り……」

燂柴迎神とは柴を燂いて天神を迎えること、承聖は「受天之命」という国璽を受けることで、ここで即位が成立。この間に溥儀は三跪九拝を行なっている。「満州古風の礼装」とは清皇帝の竜袍であり、これは「登極の儀」で着用した満州国大元帥服を郊祭でも使用するようという関東軍の意向に抵抗して溥儀が獲得した復辟の夢であつた。

しかし、傀儡王道國家満州帝国の真の「上帝」は日本帝國であつた。『即位詔書』は「有らゆる守国の遠図経邦の長策は常に日本帝國と協力同心以て永固を期すべし」と宣言している。「執政は全人民に対して責任を負ふ」と明言した暫定基本法たる『政府組織法』は廃止された。かわつて制定された『組織法』は明治憲法に模して「満州帝國は皇帝之を統治す」と書き出されている。政府の説明によれば「以前の満州国との法制上の差異」は次の三点に要約される。

- (イ) 以前の民主制を廢して君主制にした事
- (ロ) 君主を神聖不可侵とし別に輔弼機関を設けたる事
- (ハ) 軍令事務を一般國務の外に置き別に輔弼機関を設けたる事

この「輔弼機関」の実権は次長の日本人官吏が握つていたのであつて、満州帝國とはその形式・内容ともに日本帝

国の「復辟」であるのに他ならなかった。

一九三五年（昭10）、皇帝溥儀は第一回訪日後の五月、『回鑾訓民詔書』を国民に下達してその「上帝」への忠誠を要求している。

「朕 日本天皇陛下と精神一体の如し爾衆庶等更に當に仰いて此の意を体し友邦と一徳一心以て兩國永久の基礎を奠定し東方道德の意義を發揚すべし」

「日滿一徳一心」は日本支配のスローガンとなった。もちろんその収斂すべき「一」は「上帝」の意志である。一九三六年（昭11）の『滿州評論』誌上でかの小山貞知は次のように立論することができた。

「王道政治とは……哲人政治である。……玆に謂ふ王道政治とは支那古代思想の所謂王道政治に非ずして、寧ろ皇道政治と内容とするものである。即ち日本天皇の大御心を政治上に顕現完成することを理想とするものである。……今日は日滿一徳一心の關係を強化することにより、皇帝の哲人性が可能となり、滿州国王道政治の実現性と永久性を持つことになった。」

一九三九年（昭14）八月、民生部は祀孔の礼における服制をそれまでの清朝制を廢して協和服礼装をもって替え、また三跪九叩の礼もゆるやかな三鞠躬（おじぎをする）に変わった。これは翌年の国家神道導入の布石でもあったであ

ろうか。

四・滿州帝国の国家神道

（一）天皇教の導入

「日滿一徳一心」の帰結として、またもや唐突に今度は日本の国家神道が天降ることとなる。『紀元二六〇〇年』（一九四〇）に第二回の訪日をした皇帝溥儀は帰国後、『国本奠定詔書』を喚発した。

「朕玆に敬て 建国神廟を立て国本を悠久に奠め国綱を無疆に張るか為に詔して曰く我國建国より以来……日に隆治に躋る厥の淵源を仰き斯の丕績を念ふ皆 天照大神の神床 天皇陛下の保佑に頼らざるはなし……朕か子孫をして万世祇承承け無窮に孚あらしむ庶幾くは国本惟神の道に奠り国綱忠孝の教に張り……篤く神床を保たむ」

この変異を『滿州帝国概覽』は次のように説明している。

「皇帝陛下におかせられては亦御滞在中伊勢神宮、樞原神宮其の他聖地を御参拝あらせられ親しく日本肇国精神に触れさせ給ひ神ながらの大道を極めさせられ……日本天皇陛下の御心を以て御心とせられる。御乾徳高き皇帝陛下におかせられては……建国神廟に天照大神をいさまつり……永へにその奉仕を命じ給ふたのである。斯くの如く今や日

滿両国は完全に一体となり磐石の安けき上に立つを得た」

総務長官星野直樹によれば訪日の「御目的」は、「天皇陛下に御対面あらせられ神に詣でられること」にあった。

溥儀は「たとひ御暇があつても御見物等は一切遊ばされず、重大行事の前には人にも会わず「斉戒」していたという。首席接伴員本庄大將は溥儀の「敬神」の念の深さを強調している。「例へば臣下の者や、随員の者などが話してゐる話題の中に、一言、大神とか桃山と言ふ言葉が出たとき 陛下には直ちに威儀を正し、時には御起立遊ばされ

て御聴きになるのを例とするのであります」。各種文書は、溥儀が第二回訪日で国家神道の靈感にうたれて帰国後その国教化を図った、という公式見解を畫いている。しかし星野の言うように最初から「御目的」はそこにあったのであり、溥儀の伊勢参拝の日には「陛下御参拝の御時刻を期して、滿州帝国四千万国民も亦斉しく神宮遙拝の赤誠を捧げ奉った」のである。ともあれ、国家神道の導入は「皇帝陛下御躬らの御発意」で決定された。ここには「天意」も「民意の帰趨」もなく、単に溥儀の主観のみが根拠となっている。

国家神道の導入は国教の変更を意味する大事件であった。「忠孝の教」は従位にさがり、祀孔の国教からむしろ修身的儒学的立場に追いやられてしまった。滿州帝国政府編纂

の「正史」「滿州建国十年史」はこの大転換と「建国精神」とを整合するのに必死である。

「真に『滿州国』を建国せしめた原理原動力たるものは、天皇の大御心即ち 天照大神の神意であるが、建国当初に於ては一般国民の意識に明瞭であつたとは言へない。」

「正史」は続けて、「滿州建国は、事變の背後に存する精神、日本国体の原理、即ち 天皇の大御心によって、始めて実現されたるもの」である以上、「養正一徳の日本国体原理による八紘一宇の理想」とは、「建国理念そのものの開頭深化」に他ならない、と言う。

滿州国が「三千万民衆の意向」によってではなく、「事變の背後に存する精神」によって建国されたという把握は全く正鵠を射ているが、中国人民衆はもとより、板垣の言う「独立した各独立者」にとつても、国家神道は無縁の宗教であつた。建国神廟創建案が上程された臨時國務院會議では、「治安部大臣丁琛激から『天照大神とは何の神か』との質問が出ただけで、議案は一気呵成に可決された」のである。滿州国に国家神道の民衆的基礎が全く存在しなかったことは既述の通りであり、この天皇教の国教化はまさに宗教クーデターと言うべき強圧的な形で推進された。

（二）建国神廟

一九四〇年(昭15)七月、「組織法」に第九条として「皇帝は国の祭祀を行ふ」という規定が追加された。日本古代の神祇官に模して祭祀府が設置され、国務院・参議府等と並び皇帝に直隷する独立官庁となった。祭祀府総裁には元関東軍参謀長で協和会中央本部長の橋本虎之助中将、副総裁には元宮内府大臣沈瑞麟が任命された。国務院では各部総長には中国人を当て実権は日本人の次長が握るという体制をとっていたが、祭祀府にはこの種の形式的配慮すら見られない。実務官衙たる総務処、祭務処の処長は日本人が任命され、奉祀官として日本から神職が聘用された。祭務処長は元宮内省掌典の八束清貫である。

伊勢神宮の満州版として建国神廟が、またその摂廟として、靖国神社の満州版たる建国忠霊廟が創建され祭祀府の管掌下におかれた。建国神廟は宮廷府内に建設され、皇帝訪日時に伊勢神宮で修祓を受けた鏡を神体とした。その神域は逐次拡張されて一万坪に及んだが、一般国民の参拝は許されなかった。一九四二年(昭17)に神廟を移転し国民の参拝を許可する計画が公表されているが、敗戦まで実現を見なかった。建国忠霊廟の祭神は「満州事変勃発以後建国の為に殉じた英霊」(『建国十年史』)であり、創設時に二四、一四一柱、後には約五万柱に達している。新京南郊に所在して神域は一三万六千坪を擁し、造営には国民の勤

勞奉仕運動が組織された。この「聖汗奉仕」運動の動員数は延べ一四万人を数えたと言う。建国神廟は四〇年九月一日に、忠霊廟は同一八日に鎮座祭が行なわれている。建国神廟鎮座祭は午前二時過ぎという深夜に執行された。その情景を「正史」は以下のように描いている。

「皇帝陛下には……建国の元神と崇めまつる 天照大神の神霊を、此の神殿に神御親ら齋ひ鎮めまつらせ給ふた。此の間、神殿内外の燈燎は一斎に掻き消され、天地は神秘幽玄……森厳極りなき此の一瞬、奉仕員、参列員は等しく、神来の靈感に打たれ、ただ大前に深くひれ伏すのみであった。」

この鎮座祭の式次第は次の通りである。祭場への進入は参列諸員として張総理以下文武官、関東軍司令官(副総裁前導)、皇帝(総裁前導)の順で行なわれた。暗闇の中で皇帝を祭主として「天降り」の鎮祭が行なわれた後、皇帝が拝礼し「満語」の告文を述べ、橋本総裁が「日文告文を奏上輔翼」した後梅津司令官が拝礼し、皇帝、関東軍司令官の順で二人が退場してから、参列諸員が拝礼している。首相たる張國務総理は「参列員代表」として、飯村関東軍参謀長とともに拝礼し、午前四時過ぎに式は終了した。式次第に見られる通り、関東軍司令官は満州国臣下を超越し主権者皇帝に準ずるものとして扱われ、関東軍参謀長

は首相と同格に扱われた。儀式責任者は日本の陸軍中将であり、実務者たる日本人神職の長は宮中祭祀を担当していた八束である。ここに「独立国」満州の実態が最も端的に現れているのである。

満州国の国家神道は関東軍によって「創建」されたものであった。片倉衷の回想によれば、一九三七年(昭12)頃宮内庁御用掛であった吉岡安直関東軍参謀(当時中佐)より「国民精神崇敬の中心」とするために天照大神を祀ることが提起され、同年末に満州国政府および協和会中枢部において議論がかわされることになったと言う。片倉自身は「建国廟あるいは建国神廟には異論がなかったが、祭神については十分な検討を要すべしとの意見」であり、他の関東軍幹部の間でも意見が分かれていた。これを列挙すると次のようになる。

- (1) 片倉参謀——清の太祖、満蒙に因縁ある明治天皇、天神、日滿の忠霊。
- (2) 石原参謀副長——日本人関係は除き、漢民族の崇敬する祭神。
- (3) 植田関東軍司令官——各民族共通の神。これが困難なら各民族それぞれの神を選択して合祀。
- (4) 吉岡御用掛——天照大神。

この祭神問題の議論の中で吉岡案が台頭するのであるが、

片倉は「私は賛意を表さなかった。日本の神道家からも反論が出た」と述べている。『満州国史』の解説によれば、(1)案は、天神は一般になじみが薄く、清の太祖愛親覺羅は清朝の復辟という印象を与え、現帝がその子孫であるところから反対された。孔子・釈迦・キリスト・あるいは天神等の日本の神を祀るのは満州国との結びつきが無理であるとされた。石原と吉岡を両極として、片倉と植田は神々の「翼賛会」の結成を目論んでいるわけであるが、植田の言う「各民族共通の神」とはどのような内容を持つものであろうか。

とまれ、三七年八月には片倉案になる『満州国政策遂行に関する要望』が総務長官に出され、「神廟の創建に付……国家目的達成のためその理念を帰一し、各民族の信仰となり真に満州国永遠の生命の中心たるべき中心」となるよう「適切な方策」を講じることが要求されている。三九年(昭14)九月、梅津関東軍司令官の着任とともに、神廟計画は吉岡少将によって推進され、翌年六月の皇帝第二回訪日へとつながって行くのである。片倉はこれに最後まで反対であったと言ひ、四〇年七月の自らの日記を示している。「今日、満州皇帝は建国神廟と吉岡少将とを利用し、その帝位の安泰を図れりというも過言でない」

神廟問題は結果として神廟と忠霊廟という形で実現する

わけであるが、政府側にあった当時の総務庁参事官木田は次のように証言している。

「忠霊廟は、建国のため犠牲になられた人々の霊を祭るのだから何も問題はなかったが、神廟の方に何をお祭りするかということは大きな問題であった筈だ。然し政府内でも総務庁あたりで雑談的に多少話題になった程度だし、関東軍内でもそう多く議論された様子はなかったようだ。」

中樞官衙の総務庁で人事処長を務めた日本人高級官僚ですらこの程度の認識しかなかったわけである。木田は第二回皇帝訪日を担当し吉岡と二人で準備にあたっていて、彼から色々話を聞いたと言う。

「一体何の神様をお祀りするのかと尋ねたが、吉岡氏は……各民族の代表的な神様を合祀するという案、天照大神、神武天皇案について検討しているのだと云って居た。いよいよ皇帝が訪日される間近になって、天照大神を御祀りすることにきまったらと教えられた。それでその理由を尋ねたら、日満関係を一体化するには、日満共通の神様が必要だ、それに満州国は日本の庇護によって出来たのだから日本の神様は満州の神様でもあるからだ云って説明された。」

建国神廟立案の当初は従来祝日としていた孔子祭は廃止の予定であったが、参議府会議で中国人参議から「建国神廟の創建には反対しないが、孔子祭の廃止は再考してもら

いたい」との意見が出され、孔子祭は祝日よりはずすが祭日として、端午節等と同格で残されることになった。また溥儀は国家神道についての講義を受けた時の大臣の様子を次のように書いている。

「丁琛徴は、『道』の講義を聞いたが、首を横に向けていびきをかいた。しかしそのことは、彼が自分の故郷で見本どおりに大神廟を設けて、新しい祖宗にたいする忠誠を示すことの妨げにはならなかった。」

これは一幅の戯画として象徴的な描写だと言えよう。

五・八紘一字の思想

(一) 皇道連邦

先の建国神廟鎮座祭の式次第に見られるように、関東軍司令官は満州国臣下を超越した「準皇帝」として扱われていた。この事情を説明するのは、一九三六年(昭和11)九月、関東軍から政府、協和会関係者に極秘裡に配布された『満州国の根本理念と協和会の本質』という文書である。植田司令官の名によるこの文書は「満州国が日本と不可分の独立国なる真義」として、「満州国皇帝は天意即ち 天皇の大御心に基き帝位に即きたるものにして皇道連邦の中心たる 天皇に仕へ 天皇の大御心を以て心とすることを在位

の条件とするもの」であるからだと述べている。従って、

「満州国の宗主権は実質上皇道連邦の中心たる日本 天皇に在り……関東軍司令官は 天皇の御名代として皇帝の師伝たり後見人たるべきもの」であると言ひ、さらに「建国精神具現の核心は 天皇の大御心を奉じ満州国指導に任ずる関東軍司令官なり」とまで断言している。

ここにおいて「独立国」的粉飾は完全に粉砕されており、満州帝国の定義としてはむしろ論理上筋の通ったものになっている。「天意」は「三千万民衆の意向」という儒教的擬制を解かれて直截に「天皇の大御心」と同一化し、その「具現」は日本国大使たる関東軍司令官に委ねられた。この文書は続けて「満州建国は八紘一字の理想に基きたる第一段階」と規定し、次のように述べている。

「協和会の祈念する所は其の第一次に於て満州国の完成にあり、第二次、第三次に於て逐次支那に、印度に、濠州に、西比利亞に同様の王道國家を完成することはなり」

この極言的文書は、特に天皇と軍司令官の関係をめぐって当時中央省部に在任していた石原・片倉等をはじめ軍中央や満州国政府部内での反対を受けたが、関東軍はこれの撤回を拒否している。しかし、あまりに直截簡明に真実を述べたものであるがために、この段階では極秘文書に留まらざるを得なかった。

本文書が配布されてから三カ月の後に、この理論を代弁し、敷衍したのが『満州評論』誌上の小山貞知論文である。小山は言う。

「満州国皇帝陛下は……日滿一徳一心を高調せられたるが……されば今日の関東軍司令官は日本天皇の大御心を奉じ、満州国指導育成の重任を有すると同時に、天皇の御名代たる地位に於て永く満州国皇帝の御後見たるべきである。……関東軍司令官は当然また唯一の満州国の政治・経済・思想・教化等所有部門に亘り、之を直接指導すべき存在ではあるが、如斯は事実問題として到底その煩に堪へざるのみならず……されば若し真に軍司令官の心を以て心とし……身命を惜まざるあるもの発見せらるゝに至らば、軍司令官は自らは単に指導の大綱を把握するに止め……安んじて統帥方面に専念すべきである。これを神文神武の妙用といふ。そのあるものとは真の協和会員を主腦者とする政府及び協和会の組織をいふのである。」

「即ち建国精神とは……世界万邦を協和せんとする精神であり……満州国構成民族が日本民族を中核として融合協和する精神であり、且つそれによりて支那四億の民衆をして自ら渴仰させ、次いで印度三億の民衆にも自覚を促がし、延いては全亜細亞全世界に及ぼし……世界再建の為に身命を惜まざる不転退の精神、これである。」

関東軍文書と小山論文の論理の中では天命＝民意論は跡形もなく、従って皇帝の存在も全く無意味な傀儡と化している。一切の正当性の根拠は現人神天皇の意志に存するのであり、その絶対性は「皇道連邦」に敷衍される。ここにおいて「八紘一字」の論理は完成しているのである。この翌年に先述の建国神廟の祭神論争が起こるわけであるが、儒教的擬制の政治的機能を評価せず、日本支配の実態を正当化する根拠として天皇の超越的優位性に依拠しようとするならば、吉岡案に帰着するのが論理的には純粹な結論であったと言えよう。天皇の絶対性は現人神としての神格を前提とするものであって、その絶対性を承認するためには神格を承認しなければならぬ。論理的整合性という意味からは、天皇制日本の満州支配は国家神道の国教化によって完結するのである。関東軍はこの形式論理的必然を満州の地で拙速・拙劣に展開した。

しかし、神道は日本の民族宗教であった。第一章第一節で既述の通り、祭神論争が起こっていた一九三七年（昭12）の時点で、『神社協会雑誌』は神社が「大和民族特有のもの」「日本人固有のもの」であることを理由に神社行政を満州国に移管しないことを正当化している。国家神道が大東亜共栄圏構想の支柱たねばならないことはこれも論理的必然であり、それゆえ八紘一字という用語が多用される

わけである。しかしその「皇道連邦」の各構成国で神道が国教化される場合、神道は世界宗教たり得ず、支配民族の宗教であるに留まったのである。

そもそも、国家神道においては世界的普遍性、あるいは異民族支配の観念は希薄であった。『国体神祇辞典』によれば、「八紘一字」は田中智学の造語で初出は一九一三年（大2）である。この時点で「神武天皇建国の大業ありてより星霜まさに二千六百歳、日本人は、初めて八紘一字の天業に気がつきかけた」のにすぎない。国家神道の領域支配の観念はあくまでも日本列島に留まるものであった。一九三八年（昭13）の時点で、宮内省掌典・星野輝興は神道の世界観を「地上完成」という言葉で説明している。

「一番初めの思想は中心地確保、天壤無窮の皇国建設のために伊弉諾、伊弉冉尊が、その当時における凡ゆる世界を収容して、そして日本こそがその中心である、かう御認めになつたのが中心地確保であります。而して瓊々杵尊をお始め御三代はまだこの中心地に御出にならないから天皇とは申上げない。神武天皇が大和に都を遷して初めて、神武天皇といはれた。これは只中心に居るか、九州の南端に居るかの別であります。」

星野によれば、中心地を確保して「六合照徹」することが「地上完成」の意味である。彼が「地上全体」の中心に

られなければ、天皇とはいへない」と言う時、その地上とは日本列島以上のものを意味しないことは明らかであろう。建国神廟設立の二年前に、国家神道の中核での世界認識はこの程度のもにすぎなかったのである。ちなみに、厳密に言葉の定義を検討するならば星野の「日本」は「大和」と同義になり、九州は日本ではなくなってしまう。

この世界性の欠如はむしろ国家神道の本質と言うべきものである。前稿に述べたように、後の祭務処長八束清貫は掌典時代に、神社は「帝国の神祇」を鎮祭するものであると言ひ、「我が国民道徳の基礎は崇祖に在る、神社設立の根本精神、亦此の義に外ならない」と述べている。つまり国家神道とは日本列島内で大和民族が祖先崇拜を行なうものなのである。

つまり、満州国の神道国教化は、この国の特徴である拙速・傀儡性をそのままに、神道内部の理論的準備もなされないうちに、関東軍主流によって急展開されたものであった。しかしまた、それが天皇教の原理に忠実である限りにおいて、天皇制日本の満州支配の現実を最も直截簡明に表現する政治思想となっているのである。

祭務処長・八束は「建国精神」を「深く徹して想察しますれば、実は日本の肇國の大理想たる八紘一字の精神に帰結するのであります」と述べ、民族宗教・神道の世界支配

の論理を次のように結論している。これが神道側の公式見解であるので、煩をおそれず引用しよう。

「満州帝国は其の建国事情に明かなるが如く、単に人意のみならず、其の背後に澎湃たる何物かの力によって推し進められたことは之を意識するとせざるとに拘らず、否定し得ない所でありまして、この力こそ天業恢弘を貫く大稜威の発現であつたのであります……從來聊か不明確の憾みなしとしなかつた建国精神の根底が、今回の建国神廟御創建の事実、並に『国本奠定詔書』によりまして最も直截に御明宣遊ばされたのであります。即ち落ちつくべき所に落ちつき、徹底すべき所に徹底したといふ清々しさを感ずるのであります。」

「詔書、宣言等に於て屢々拝する所謂『順天』、『奉天』、『天意』、『天命』などの御言葉の意味は、從來の支那に於ける天の意味を遙かに超越した最も具体的に天照大神の御神意によらせ給ふことであり、この神意のまに／＼といふことが即ち『国本奠定詔書』に仰せられてゐる『惟神の道』である。

『惟神の道』は……明治天皇が教育勅語の中に、御宣明になりました如く『之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス』と仰せられた天地の公道であり、世界性を内包せる原理で……日本の歴史に於て看取し得るゝが如く、

其の作用面に於ては驚くべき寛容性と、健啖なる消化力をもつてあるものでありまして、異種の民族及び文化に対しても常に其の長を採り短を棄て、新陳代謝の滋養摂取によつて新らしい事態によく適応、これを超克して更に発展を遂げて来た。

後段の「健啖なる消化力」云々は意味不明であるが、「作用面」とは政治史・文化史上の大陸文明の摂取を意味しているのであらう。ここで八束が宗教的「世界性」の論拠として唯一具体的に挙げてゐるのは「天地の公道」としての『教育勅語』である。つまり「皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所」の「斯ノ道」であつた。かくて、天皇教は「中外」に適用されることになるが、その「世界性」とは日本を大陸大に延長しようとするものであつて、異民族の「皇民化」をはかろうとすることに他ならない。

『海外神社の史的研究』の著者近藤喜博も、大東亜共栄圏の政治思想として国家神道の適用地域を拡大する必要を感じてゐた。彼は建国神廟の設立によつて「伝統的の惟神の大道が対内的の偏狭なものやうに解された時代は既に過ぎ」たと言ふ。太平洋戦争下の「共栄圏の民族」は「祖孫一体の血の關係」に入らねばならないが、これを保障するのは天皇の「神業」である。

「満州建国」と云ひ、中華民國の更生、泰國の強化、ビル

マの独立……そのまゝに大稜威の下に行はるゝ国生みであり修理固成であると解せられる。斯くして修理固成された国々は、神そのまゝの天皇によりて生れたものであるから、従つてわれわれと血の連続が意識されねばならない。」

近藤は日本の文化が「民族文化」であることを認めながら、それは「日神」による「中心」の文化であつて、「周辺」の文化を「裡に」はらみつゝ「普遍光被」するものだと言ふ。彼は吉村正に従つて「大東亜」の範圍をベーリング海峡を頂点とし東は南北アメリカ大陸の西岸を右辺とする一辺、西は日本列島からアジアの東南岸を経てインドに至る一辺、南はオーストラリアを貫く一辺、の三辺によつて囲まれる地域と規定し、神道を「大東亜の宗教」であると述べてゐる。近藤の「地政学」では近畿は中心にならな

いが、ともかくも「宇内」の範圍は拡大されてゐる。

八束や近藤が論証しようとした国家神道の世界性はそれ自体拙劣なものであるが、天皇制日本のアジア侵略が領土併合という形式をとらず、傀儡政権の設立という方法をとる場合に、これを国家神道の理論から正当化しようとした試みであつた。異民族「独立国」内における天皇支配を合理化しようとする場合、八束も近藤も「人意」を超越した天皇の「大稜威」に依拠する他はなく、またこれを前提とする以上異民族は天皇教徒として皇民化されなければなら

ないのは論理的必然である。「周辺」は「中心」に服属しななければならない。

片倉は建国神廟について「当時、日本人の中にも皇室と帝室との相違を深く考慮せず、日本人特有の独りよがりて処理した焦燥、短見、長期的展望の欠如が招いた一つのミスであつた」と批判している。これは軍政家が占領行政の功利性という点から選択肢を選ぼうとする時には、有効な批判であらう。しかし、その「日本人特有の独りよがり」の中にこそ、国家神道の本質が現れているのである。八束自身、掌典時代には「神社非宗教論」を体系化している国家神道の理論家であつた。その彼が満州においては単なる国民道徳に基づく「国家祭祀」ではなく、建国を「大稜威の発現」という神靈現象と見て、統治原理としての神意（二）天皇の意志を高唱している。満州国の「国本」は神意に基づき、祭祀府は皇帝に直隸する「神祇官」であつた。国家神道は日本国内における非宗教的擬制を大はばに脱ぎ捨ててゐるのである。満州には日本国内のような民俗的・民衆的基礎は存在せず、またこの時期には関東軍が政治的配慮をすべき内外の勢力も存在しなかつた。かくて、満州の国家神道は相対的により純化されたものとなり、天皇制の「上から」の支配を正当化するその本来の役割を露わにしているのである。

（二）民族差別の正当化

前節で述べたやうに、「皇道連邦」とは日本を宗主国とし異民族の傀儡国家がこれに隷属する垂直的な支配關係を内容とするものであり、その根拠は「宇内」の主権者天皇の神格に置かれた。この論理は、異民族統治の實際面において民族差別を正当化する論理へ移行する。

「正史」の「国民構成上に於ける日本人の地位」という項は、日本人は「日本帝国臣民にして同時に満州国の中核的構成要素である」と規定している。「日本国体原理を体得し、大御心を具現し実践すべきものは第一次に日本人なるが故に、日本人は日本帝国臣民たる資格本質をそのまゝに満州建国の中核（三）たるべきなのである。

一九四〇年（昭15）の統計（表10）において、満州国の総人口は四、一六六万人、うち「日系」は八六万二千人とされている。全人口の約二%である。「満系」が約九五%、「鮮系」が約三%という民族構成の中での民族協和スローガンの政治目的は明らかであらう。

「正史」によれば、「民族協和」とは「平面的な融和關係ではなくて、指導的先達の民族即ち日本人の建国理想実現への奉仕精進を中心として、他の民族が追従努力すること」（傍点引用者）に他ならない。

当時、「日本人は中央行政機関より地方行政機関、其他

表10・満州人口の推移 (単位千人)

年次	地域	総数	満系	日系	鮮系	其他
大同二年	全土	三二、二八八	三一、二八八	三一七・六	五八二・一	一〇〇・六
昭和八年	満州国	三〇、八八〇	三〇、一九一	三八・六	五五二・一	九八・四
一九三三年	関東州	一、〇〇四	八六二	一三九・〇	二・二	〇・九
	鉄道附属地	四〇四	二三五	一四〇・〇	二七・八	一・三
康德三年	全土	三六、九三五	三五、四七五	五三六・五	八五四・四	六八・九
昭和一年	満州国	三五、二五五	三四、二〇二	一六六・七	八一九・六	六六・三
一九三六年	関東州	一、一四八	九七五	一六六・五	四・〇	一・六
	鉄道附属地	五三三	二九八	二〇三・二	三〇・八	一・〇
康德七年	全土	四三、〇五四	四〇、五六八	一、〇六五・一	一、三五〇・九	六九・五
昭和五年	満州国	四一、六六一	三九、三八五	八六七・二	一、三四五・二	六七・九
一九四〇年	関東州	一、三九三	一、一八三	二〇二・八	五・七	一・六

出典・大蔵省『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第一冊、一三四頁。なお、調査機関によって同時期の数字でも差異がある。

協和会等の諸組織に至るまで、その人数に於て龐大であるのみならず、その地位に於ても実質的な指導性をもっていることは周知の通り⁽¹⁾ (細川嘉六)の事実であった。この日本人支配を説明するのが一九三三年 (昭八)の閣議決定『満州国指導方針要項』の第三項、「満州国に対する指導は現制に於ける関東軍司令官兼在満帝国大使の内面的統轄

の下に主として日系官吏を通じて実質的に之を行はしむるものとす⁽²⁾」という記述である。政策実施の主体たる政府機構は完全に関東軍の支配下にあった。軍司令官の権限は「大綱」を握る程度のもではなく、「内面指導」の名の下に満州国政府を事実上軍政の一部局として直接支配したのである。一九三四年 (昭九)の関東軍『対滿政策遂行に

表・11 人事手続

日人官吏人事手続区分

区分	担任庁	軍司令部 (第三課)	特務機関
簡任	異任 免職	事前承認	軍司令官に資料報告
薦任	異任 免職	事前承認	軍司令官に資料報告
委任	異任 免職	県参事官、属官主席警務指導官は事前承認其他は爾後諒承	事前指導
雇傭人	右 同	日満人の比率に付き予め承認	所管々轄内のものに付実施監督
嘱託	右 同	待遇に応じ右各項に準ず	

満人官吏人事手続区分

区分	担任庁	軍司令部 (第三課)	特務機関
簡任	任	事前承認	軍司令部に資料報告
課長級以上の薦任	同	右	同
科長級 (含まず) 以下の薦任及委任	事後報告	所管々轄内のものに付同上	同

現人神と八紘一宇の思想 (島川)

関する意見⁽³⁾は部外秘として「簡任以上並主要位置の人事は特に軍に於て厳に審査すると共に之が挙措を絶えず監察す⁽⁴⁾」と述べている。翌年四月の参謀部名の『人事に関する事項』は、「満州国に服務する日本人官吏に対する軍司令官の推薦 (取消を含む) 権に基く日人官吏の人事権は将来に亘り永く之を確把し断じて其改変を許さず⁽⁵⁾」と言い、「内面指導に基く日本人以外の満州国官吏の人事は実質的に軍司令官掌握し其取扱は原則として國務院総務庁長を通じて之を行ふ⁽⁶⁾」と述べている。同年五月の『満州国人事行政指導方針要項』は上の表①の細部規定を掲げた。

この『方針要項』に対して、陸軍省軍務局長の暗号電は特務機関の役割については「考科資料を蒐集し随時所要の進言補助をならしむる程度に止むること」を勧めているが、基本方針には「人事行政の基礎を確立する為の暫定的措置として貴方案に同意す⁽⁷⁾」と許可を与えている。日本人支配の結果として、この頃までに日本人官吏の数は約三千、准官吏を含めれば六千人に達し、「日満人の比率は中央官庁に於て既に一对一を超過⁽⁸⁾するまでになっていた。

約二%の日本人を「中核」として、「日満一徳一心」満州の日本化政策が遂行された。日本語は中国語とともに国語とされ、国民学校では正課となった。式日も日本の紀元節、天長節、明治節を加え、学校では当日に日本国歌を合

唱させるとともに、宮城と帝宮に対する遙拝が行なわれた。『回鑒訓民詔書』は日本の教育勅語と同様に「学校其他の重要な式典に際し、必ず捧読」された。学校教科として

は「建国精神教科」が置かれた。一九四〇年（昭15）には「建国十周年慶祝歌」が作られ、その歌詩は八絃一字をうたいあげた。

慶祝歌

一、八絃字と天照らす

ひかりあまねくかどやきて
帝徳のもと民むつぶ

謳へ頌へよこのめぐみ

建国ここに十周年

一、八絃一字奏鈞天

仁沢恩光被四表 帝徳巍巍民具瞻
祝我満州建国 於茲十周年

二、忠烈花とかんばしき

いさを仰ぎつ親邦の
あつきよしみに応へなん
祝へことほげこのよき日
建国ここに十周年

二、豊功偉烈仰前賢

報国丹誠万世伝
同徳同心昭信誓 吾儕相慶国祚綿綿
祝我満州建国 於茲十周年

三、彩なす雲と湧き立ちて

いよよさかゆくこのみ国
興亜のちかひおごそかに
果せ我等の大使命
建国ここに十周年

三、興邦壮志転坤乾

黒水白山気万千
東亜造成新秩序 吾儕使命重荷双肩
祝我満州建国 於茲十周年

これは皇民化の当然の帰結であったが、「建国精神」の変転は学校教科書の編審官たちを困惑させている。民族協和・王道楽土・道義世界の建設・日満一徳一心・八絃一字などの言葉が次々に使用され、「編審上の立場としては単なる文字の羅列のみでは空しさや無意味を感じることを避けることはできなかった。ことに……『惟神の道』が国本と定められて以来、いっそうこの感を深くした」という。思想統制の当局者にしてかかる感慨を禁じえないのであり、中国人にとっては全く無意味なるものであった。「正史」は「学校教育」について「下層国民への徹底を見るの日は尚未だ遑遠」であることを率直に認めている。「満州国の国家的成立を否定して国家を危うせむ魔手は多くの場合に於て最も感激性に富む青年時代の学生をとらへて、満州国文教の根本精神と正反対の思想や行動に向はしめつゝある」という記述は、権力側の敗北宣言と言えよう。そもそも、「政府の布令」も「村長までは達するもその以下の民衆に達するや否やを疑はるゝという現状」なのであった。約三〇%の朝鮮人は「日本人たる本質の下に満州国構成分子として」扱われた。一九三八年（昭13）の関東軍『在満朝鮮人指導要項』には、朝鮮人の「一部の誤れる優越感を抑制」し、特に間島地方などで「鮮満人間の対立的感情を激化せしめざる如く留意」すべきであるとの言及が見える。

現人神と八絃一字の思想（島川）

在満朝鮮人には(1)満州事変以前に間島地方を中心に既住していた者と(2)事変後の移民とがある。間島地方は一九三〇年代前半に「全東北の抗日運動の先進地帯」であり、満州国成立後に日本軍警は中国人に対する優位を宣伝して朝中民族間の離反をはかっている。また(2)の移民は進捗を見せない日本人移民の代替として朝鮮総督府によって推進されたもので、国籍の上では一応日本人であった。「一部」に支配者側の一員としての意識のあったことがうかがえる。大多数の国民たる中国人や、モンゴル・ロシア系などの少数民族はただ日本人に「追従努力」すべき存在にすぎなかった。一九三五年（昭10）の林陸軍大臣の『満州の現況に就て』御進講資料の中では「満漢人の習性は強力なる軍権の支配下に於てのみ制御せらるべきものとして言及されている。また、かの『満州国の根本理念と協和会の本質』では、『我大和民族』は「他民族を指導誘掖し、其足らざるを補ひ努めざるを鞭打ちまづるはざるをまつるは、せいで道義世界の完成に偕行せしむべき天与の使命を有す」（傍点原文のまま）と言う。これは日本の暴力支配の宣言であるが、一方で「軍権」をもってしか統治しえない現実を示すものでもあった。反満抗日の抵抗は持続し、一九三三年（昭8）に中共中央の宣言した「満州に秩序を建設せんには、武装の整備されたる十万の正規日本軍隊と十

年の歳月とを用ひて始めて成就し得るのであらう」という予想は現実のものとなつたのである。

中国人は日本人・朝鮮人・中国人という「垂直的融和関係」の底辺にあつた。この垂直性の一つの現れに、民族別の賃金格差がある。一九三九年(昭14)の「日本人経営工場・鉱山の平均実収賃金」を見ると、日本内地人・朝鮮人・満支人の男子賃金比は工場で一〇〇・四〇・二九、鉱山で一〇〇・三九・二九であつた。また、調査年がはっきりしないが、この頃の工・鉱・土建・荷役・運輸業賃金の平均比は日・鮮・満支それぞれ一〇〇・三九・三一となつてゐる。

(三) 敗戦と神社

最後に満州国崩壊時の神社の運命について見ておこう。神社は日本人の宗教として満州に移入されたものであり、敗戦の結果として、日本人とともに撤収されるべきものであつた。その状況について、『神社本庁十年史』は次のようにまとめている。

「満州はソ軍侵入後、数日を経過して、終戦の詔書を奉戴した様な情況であり、当局の指令も間に合はず、三々五々として新京神社境内に、各地の神社の御霊代を一時避難奉遷せられた。同国教学部長より『非常事態出来の際は、

昇神祭を斉行、霊代は奉焼、社殿は適当に処置すべし』の訓令が発せられたが、この訓令は間に合わず、中には御霊代を奉じて、各地を転々と避難奉遷、最後に奉焼したものあり、又避難地に奉遷の儘となつたものもある。(通遼神社) 新京神社は昇神祭後、氏子の総意に基き、再び、神霊を奉招して氏子等がこれを崇敬したが、遂に時局切迫の爲め、御霊代を奉焼した。同時に境内に避難せられた各神社の御霊代も奉焼の儀を斉行した。殿舎等でソ連軍の宿舍にせられ、又原住民等の破壊炎上に任された例も少くない。(新京神社、佳木斯神社)」

当然の結果であらう。日本人側の「本宮」新京神社については、元興農部の官吏の記録がある。

「新京神社は……電車が神社の前にさしかかると、車掌が『ただいま新京神社の前を通ります。』と告げると、国籍、人種を問わず、脱帽してうやうやしく頭を下げて通つたものである。歩行者ももちろんのこと礼拝して通つた。……しかるに、終戦と同時に拝殿は荒らされ、満人の子供の遊び場になり、満人や朝鮮人は、礼拝する代わりに唾を吐きかけてゆく状態であつた。終戦の翌年の春……計十七名が新京神社最後のお祭りのために集つた。荒廃した奥殿で雅楽の音も外部に漏れぬように気を配り、祝詞も声を秘めてとなえねばならなかつた。」

建国神廟とその神体については『神社本庁十年史』は何も触れていない。溥儀は自伝の中で敗戦時の新京脱出行を次のように記述している。

「吉岡は私と随行の侍従たちに命令口調で言つた。『歩く場合だろうと、車の乗り降りのときだろうと、橋本虎之介が奉持する「神器」が先です。だれであらうと、「神器」の前を通りすぎるときは、九十度の最敬礼をしなければいけません』……私はうやうやしく立って祭祀長橋本虎之助が『神器』を入れた袱紗を捧げて一台目の自動車に乗るのを見てから、自分は二台目に乗つた。車は『帝宮』を走り出た。私がふり返って見ると、『建国神社』の上空に炎があがつてゐた。」

溥儀、溥傑、吉岡、橋本、外島祭務処長の逃亡者一行は中継地の瀋陽飛行場でソ連軍に拘束された。その後の「神器」については、『満州国史』によれば「神剣」は橋本とともにシベリアへ渡り、そこでソ連側に没収された。「神鏡」は釈放された外島が所持して長春にとどまり、その後新京神社社宅に移され、翌年五月「当時の不安定な状況から万一神器に汚辱あることを慮り、増田総務処長が祭主となり、昇神の儀を執り行なつた」という。これが先の「新京神社最後のお祭り」であらうか。神鏡は同年初冬に居留民団の荷物として博多港に着いたことは確認されているが

「その後の行方は否として不明」になつた。

建国忠霊廟については、「周囲がにわかに不穏となる空気があつたので、祭祀府職員の合議により、九月一日霊壘を同廟において焼却に付し、事故を未然に防止した」という。

満州の民衆に全く無関係に天降つた大日本帝国の神々は民衆の反撃を恐怖しつつ昇天したのである。

六・結 語

国家神道は、本来日本列島を信仰の範囲とする民族宗教であつた。日本においてこそ、伝統的民俗的信仰を基盤として、官製宗教でありながら一定の民衆的基礎を有するものとなりえたのである。またその偏狭な「国粹」的特質こそが、「天孫降臨」民族としての日本人の自意識の統合を誘導するものであつた。教義上、天皇教・国体教たる国家神道は世界宗教たりえず、世界支配を意図する政治権力を正当化すべき普遍的内容を持たなかつた。

国家神道の理念の中で、天皇の世界支配の根拠とされたのが「八紘一宇の思想」である。これは日本列島大の神道世界をアジア大に拡大して天皇支配を正当化しようとするものであり、論理的帰結として被征服国民の皇民化に結び

つくことになる。しかし、神道界の内部ではその理論的準備はなされておらず、「大稜威の発現」という天皇信仰の次元に飛躍せざるをえなかった。『独立国』満州の支配は近代日本の最初の経験であったが、満州支配にとどまらずアジア各国の支配に共通する統治原理として天皇の意志を提示したのは関東軍であった。「皇道連邦」とは日本を宗主国とする傀儡属国群の創出を想定するものであった。日本と従属国家間の「垂直的融和関係」は日本民族と他民族の間の支配関係に敷衍されて、大東亜圏の軍事的制圧を正当化する理念となった。この日本のアジア支配の根拠とされたのが、現人神天皇の神権性である。

日本国内では、宗教であることの明確な国家神道は非宗教化されて事実上の国教という立場をとり、天皇の神権性も立憲君主制という衣裳をまとっていた。満州においては民俗的伝統や民衆的基礎を全く欠いたままに、支配の根拠として天皇の意志が提示され、国家神道はより暴力的な形で「事実上の国教」化された。満州の国家神道は民衆的基礎を欠いていたがゆえに「上から」の支配の論理としては純化されて、天皇教の暴力的本質を映す最も良い鏡となっているのである。一切の根拠は現人神天皇の意志にあった。

- (16) 『海外神社の史的研究』三〇三頁。
- (17) 『満州国史・各論』一一七頁。
- (18) 『満州年鑑』昭和八年版・五七一―七三頁。
- (19) 『満州事典』昭和十四年版・三五〇頁、『満州帝国概観』康徳五年版・一一六頁、満鉄鉄道総局弘報課編『満州宗教誌』（一九四〇）二六九頁。
- (20) 『満州宗教誌』二〇七頁。
- (21) 同・二二九―五〇頁。
- (22) 日本外事協会編『満州帝国総覧』（一九三四）五一七頁。
- (23) この種の布告・法令等は『満州国史』に集成されている。
- (24) 以下特に注記しない基本資料はすべて本書による。
- (25) 國務院統計処編『第二次満州帝国年報』（一九三五）六五―六六頁。
- (26) 同『第一次満州国年報』（一九三三）四三五―三六頁、『第二次満州国年報』六六一―六七頁。
- (27) 『満州国史・各論』一一一〇頁。
- (28) 『第一次満州国年報』四三四―三五頁。
- (29) 同・四三五頁、『満州国史・各論』一一一〇頁。
- (30) 『満州建国十年史』七九九頁。
- (31) 同・七九六、七九九頁。
- (32) 「板垣少将講演筆記・亜細亜は亜細亜人で守れ」『満州評論』三卷二二号（一九三二）一九一―二〇頁。
- (33) 角田順編『石原莞爾資料・国防論策編』（一九六七）四二―八九頁。関東軍の対満方針の変遷については緒方直子『満州事変と政策の形成過程』（一九六六）参照。
- (34) 小山貞知「王道主義国家連合」『満州評論』三卷二二号（一九三二）一

現人神と八紘一宇の思想（島川）

- (1) 拙稿「現人神と靖国の思想」『立教女学院短期大学紀要』一四号（一九八二）参照。
- (2) 「満州」「満州国」は歴史的名称として使用する。満州国については最近一〇年ほどの間に政治史・経済史においては本格的な研究が行なわれるようになった。概説としては岡部牧夫『満州国』（一九七八）、今井清一編『十五年戦争と東アジア』（体系・日本現代史二）一九七九、参照。
- (3) 堀江秀雄「満韓に於ける神社」『神社協会雑誌』五卷一二号（一九〇六）。
- (4) 岡田包義「満州の神社」『神社協会雑誌』三六卷一〇号（一九三七）八頁。
- (5) 『満蒙年鑑』昭和七年版・四五四頁。
- (6) 岡田・前掲論文・一〇―一一頁。
- (7) 満州国史編纂刊行会編『満州国史・各論』（一九七〇）一一七頁。
- (8) 前掲拙稿・一七二頁参照。
- (9) 『満州年鑑』昭和十一年版・四九八―九九頁。
- (10) 同・昭和十二年版・三八八頁、昭和十三年版・三七五頁。
- (11) 近藤喜博『海外神社の史的研究』（一九四三）三〇七頁。
- (12) 岡田・前掲論文・九頁。
- (13) 同・一四―一五頁。
- (14) 満州帝国政府編『満州建国十年史』（復刻・一九六九）九〇頁。
- (15) 宇佐美毅「満州国に於ける治外法権撤廃と神社行政」『神社協会雑誌』三六卷一二号（一九三七）四頁。

- (16) 九三二）九一―一頁。
- (17) 小林・島田編『現代史資料七・満州事変』（一九六三）五八九頁。
- (18) 愛親寛羅溥儀『わが半生・「満州国」皇帝の自伝』上（一九七七）三〇五―一〇頁。工藤忠「皇帝溥儀・私は日本を裏切ったか」（一九五二）一九〇―九二頁。
- (19) 小山空庵「満州国と復辟問題」『満州評論』四卷三三（一九三三）一一一―一三頁。
- (20) 橋樸「帝政是非」同・三頁。
- (21) 中保与作「満州国皇帝・新帝国創建秘史」（一九三一）二〇五―〇七頁。
- (22) 同・三〇三頁。
- (23) 同・三〇八頁。
- (24) 國務院総務庁情報処編『満州帝国概観』康徳三年版（一九三六）一八頁。
- (25) 『満州国皇帝』三二四―二六頁。
- (26) 『わが半生』下・二九―三〇頁。
- (27) 國務院総務庁情報処『満州帝国組織法』（一九三四）一二頁。
- (28) 小山貞知「満州帝国協和会とは何ぞや（其の三）」『満州評論』一一卷二三号（一九三六）一二頁。
- (29) 『満州国史・各論』一一一〇頁。
- (30) 満州事情案内所『満州帝国概観』康徳九年版（一九四二）二二―二四頁。
- (31) 星野直樹「皇帝陛下の御訪日に近侍して」久保田寛己編『満州帝国皇帝陛下御訪日と建国神廟御創建』（一九四二）七頁。

- 49 本庄繁「満州皇帝陛下の御訪日について」同・九一〇頁。
- 50 山懸武夫「皇帝陛下御訪日を迎へ奉りて」同・六九頁。
- 51 「本庄大将謹話」同・一〇九頁。
- 52 「満州建国十年史」七一九頁。
- 53 「満州国史・総論」六七〇頁。
- 54 同・六七四―七八頁、『建国神廟御創建』九三頁、『満州建国十年史』三八頁、建国十週年祝典事務局『大満州帝国建国十周年記念写真帖』(一九四二)
- 55 「満州建国十年史」二八二九頁、『建国神廟御創建』八七頁。
- 56 片倉衷「片倉衷・回想の満州国」(一九七八)二四〇―四二頁。
- 57 「満州国史・総論」六六八―七〇頁。
- 58 「片倉衷・回想の満州国」二四一―四二頁。
- 59 木田清「建国神廟の祭神」満州回顧集刊行会編『あゝ満州』(一九六五)八七―八八頁。
- 60 「満州国史・総論」六七三頁。
- 61 「わが半生」下・五三一―五四頁。
- 62 小林・島田・稲葉編『現代史資料一・統満州事変』(一九六〇)九〇九―一一頁。
- 63 鈴木隆史「満州国協和会試論(二)」『季刊現代史』五号(一九七四)一一―一二頁、同『満州国論』『一五年戦争と東アジア』一七五―七六頁。
- 64 小山貞知「満州帝国協和会とは何ぞや(其の五)」『満州評論』一一卷二五号(一九三六)一六一―一七頁。
- 65 同「同(其の四)」同・一一卷二四号(一九三六)一一頁。

- 66 小倉鏗爾『国体神祇辞典』(一九四〇)一四二二―二三頁。
- 67 星野輝興「祭祀の神髓」内務省警保局編『警察幹部浴恩館講話録』(一九三九)五九一―六〇頁。
- 68 八東清貫「神社に就いて」加藤玄智編『神社対宗教』(一九三〇)一〇八頁。
- 69 同「惟神の道こゝに徹底」『建国神廟御創建』二二二―二六頁。
- 70 「海外神社の史的研究」三一四―五三頁。
- 71 「片倉衷・回想の満州国」二四三頁。
- 72 「満州建国十年史」九一―一〇頁。
- 73 同・二一頁。
- 74 細川嘉六「植民史」『現代日本文明史一〇』・一九四(一)四四五頁。
- 75 「現代史資料七」五八九頁。
- 76 「現代史資料一」九一七、九二〇、九二五頁。
- 77 同・九二七頁。
- 78 同・九二三頁。
- 79 「満州国史・各論」一一〇八―〇九頁。満史会編『満州開発四十年史・補巻』一〇四頁。徳富蘇峰『満州国読本』(一九四〇)一〇二頁。
- 80 「満州国史・各論」一一〇八頁。
- 81 「満州建国十年史」六八七、六八九頁。
- 82 「満州国史・各論」一一〇一頁。
- 83 「現代史資料一」九三八頁。
- 84 梶村秀樹「朝鮮の社会状況と民族解放闘争」『岩波講座世界歴史二七』(一九七二)二六四頁。

- 85 対満朝鮮人移民については松村高夫「満州国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」満州史研究会編『日本帝国主義下の満州』(一九七二)、依田憲家「満州における朝鮮人移民」満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』(一九七六)参照。
- 86 「現代史資料一」九三八頁。
- 87 同・九〇八頁。
- 88 「中国共産党中央執行委員会の満州省委に対する一九三三年一月書翰」『満州共産匪の研究』付録(復刻・一九六四)五頁。
- 89 中国民衆の反満抗日運動については浅田喬二『日本帝国主

- 義下の民族革命運動』(一九七三)四三二―七七頁、田中恒次郎「日本帝国主義の満州侵略と反満抗日運動」『日本帝国主義下の満州移民』参照。
- 90 「植民史」四八三頁、前掲松村論文・三〇〇―一頁参照。
- 91 神社本庁編『神社本庁十年史』(一九五二)四六頁。
- 92 三箇功「新京神社最後のお祭」『あゝ満州』八六八―六九頁。
- 93 「わが半生」下・七六頁。
- 94 同・七八頁、『満州国史・総論』六七九―八〇頁。
- 95 「満州国史・総論」六八〇頁。

付表I

在満神社一覽

関東州

神社名	鎮座地	祭神	配祀	氏子戸数	創立年月
羅順神社	旅順	大崇徳主天神		五〇〇	昭和一〇年二月
大連神社	大連	天照皇大神 明神 大國主神 靖國主神	天之御中主神 高皇產靈 皇土產靈 神	二二、二〇〇	明治四二年一〇月
金刀比羅神社	大連	大徳物主神		一、五〇〇	大正七年二月
恵比須神社	大連	事代主神	大國主神	一〇五	大正四年一〇月
沙河口神社	大連	天照皇大神 大國主神 明神	伊勢許里度売神 玉置帆負神	二、五五〇	大正三年一〇月
関水神社	老虎灘	崇徳代主神		四〇	明治四一年一〇月
柳樹屯稲荷神社	柳樹屯	宇賀魂神		四七	大正八年六月
小野田神社	周水子	猿田彦神		一七二	大正七年六月
周水神社	周水子	天照皇大神 大國主神 大明神		一二〇	大正一二年六月

金州神社	金州	天照皇大神	大明神 靖國主神	四六〇	昭和八年六月
普蘭店神社	普蘭店	天照皇大神		二〇〇	大正一三年七月
貔子窩神社	貔子窩	天照皇大神	大國主神 食神	四〇三	大正一四年六月

南満洲鉄道附屬地

神社名	鎮座地	祭神	配祀	氏子戸数	創立年月
瓦房店神社	瓦房店	天照皇大神 大國主神		八三九	大正元年二月
草河口神社	草河口	天照皇大神		三八	大正三年八月
通遠堡神社	通遠堡	天照皇大神		二五	大正八年五月
鉄嶺神社	鉄嶺	天照皇大神 明神 大國主神 靖國主神		九〇二	大正七年一月
新台子神社	新台子	天照皇大神		五五	大正一一年九月
開原神社	開原	天照皇大神 明神 大國主神		四九七	大正四年一月
昌図神社	昌図	天照皇大神		八八	大正五年九月

現人神と八紘一宇の思想(島川)

四平街神社	四平街	天照皇大神 天照皇大神 天照皇大神	一、五四三	大正八年六月
公主嶺神社	公主嶺	天照皇大神	一、二二二	明治四二年五月
郭家店神社	郭家店	天照皇大神	五七	明治四二年五月
新京神社	新京	天照皇大神 天照皇大神 天照皇大神	五、〇〇〇	大正五年一月
新京稻荷神社	新京	宇加之御魂神	八八	大正二年五月
范家屯神社	范家屯	天照皇大神	一三六	大正四年一〇月
計三二社				

合計四四社

(昭和一〇年二月末現在)

付表Ⅱ

満州国内之部

神社名	領事館管内 別鎮産地	祭神	氏子又は崇敬者戸数	設立案月日
錦州神社	錦州	天照皇大神	一、四九一	昭和八、六、二二
鄭家屯神社	鄭家屯	同上	三五〇	大正一一、
通遼神社	同上	明治天皇	二五〇	昭和一〇、五、四
朝陽川神社	間島	大國主命	一三八	同九、九、二八
明月溝神社	同上	天照皇大神	四二	同 一〇、六、九
間島神社	同上	天照皇大神	五、一五五	大正一四、一〇
延吉神社	延吉	同上	五〇〇	昭和一〇、九、二七
図門神社	図門	同上	一、〇〇〇	同六、一二、二五
百草溝神社	百草溝	同上	六二	昭和四、九、一八
柴溝神社	同上	同上	二三	同九、三、一
吉林神社	吉林	天照皇大神 天照皇大神 天照皇大神	二、五〇〇	同 一〇、五、三一
敦化神社	敦化	天照皇大神	五三三	同七、九、二三
新站神社	同	明治天皇 天照皇大神	一八六	同 一一、九、一四

現人神と八紘一宇の思想(島川)

博克圖神社	同	上	天照皇大神	四四〇	同	一〇、九、一五
竜鎮神社	同	上	同	三八	同	八、一〇
北安鎮神社	同	上	同	三九三	同	二九
齊々哈爾神社	同	上	天明 照治 皇天 大神	二、〇〇〇	同	九、九、一五
弥采神社	同	上	同	三二〇	同	八、一〇、一四
林口神社	同	上	同	二五〇	同	一、五、六
富錦神社	同	上	同	一八八	同	一〇、五、一三
鹿道神社	同	上	天照皇大神	二三〇	同	一、一〇、一三
新安鎮神社	同	上	朝明 鮮治 神天 宮皇	一、五一九		
牡丹江神社	同	上	大天 照皇 主大 命神	不明	同	一、一、六、三〇
綏化神社	同	上	同	二〇〇	同	一、九、一九
海倫神社	同	上	同	二〇〇	同	一、
哈爾賓神社	同	上	同	八、三〇〇	同	一〇、三、一〇
德惠神社	同	上	明大 天照 治皇 主大 皇命神	二〇二	同	一、一、三

札蘭屯神社	同	上	天明 照治 皇天 大神	九八	同	一、一、一、五
白城子神社	同	上	同	五四六	同	一〇、一、二、四
王爺廟神社	同	上	天明 照治 皇天 大神	一八二	同	一、一〇、一五
赤峰神社	同	上	天明 照治 皇天 大神	三八四	同	一、一、一、一三
廻場神社	同	上	天明 照治 皇天 大神	一、六二三	同	九、二、二五
葉柏壽神社	同	上	同	一三〇	同	一、一、九、一八
承德神社	同	上	天明 照治 皇天 大神	一、〇〇〇	同	九、一、一、二
凌源神社	同	上	天明 照治 皇天 大神	一一六	同	八、一、一、三
平泉神社	同	上	天照皇大神	一五〇	同	一〇、一、二、八
計	同	上		二九、七三九		

出典・『神社協会雑誌』三六卷一〇号。

(昭和十一年二月末現在)

(立教女学院短期大学講師)

現人神と八紘一宇の思想(鳥川)